

現状

2021年年末からオミクロン株が世界中で猛威をふるってきました。アメリカでは比較的早くおさまりましたが、日本では緩やかに減少しつつもまだ高め傾向にあります(グラフ1)。アメリカでは最近、新型コロナウイルス感染症(以下、コロナと略)が終息したと思わせるほど、マスクなしの大イベントが以前のように開催され、街も活気を取り戻していますが、4月から新規感染者数は再び増加し始め、6月時点のハリスカウンティの警戒レベルは3(黄色)となっています。この新規感染者数にはセルフキットで陽性だった人の分は含まれていません。今の落ち着いた状況を楽しみつつも、今後の動向に注意が必要です。

変異株

一般的にウイルスは増殖や感染を繰り返す過程で徐々に変異をし、デルタ株やオミクロン株に起きた変異のように、感染性やワクチン・治療の効果などに影響を及ぼす大きな変異も起こります。オミクロン株「BA.1.1.529」も、その亜種が数種類登場し、南アフリカ共和国やヨーロッパでは、BA.4とBA.5に、アメリカでは、BA.2.12.1に徐々に置き換わりつつあります。BA.2.12.1の伝播性が高いことが東海岸を中心とした新規感染者数の再増加に関与しているようです。また、これらの亜種は、従来のコロナウイルスやBA.1に感染したことで得られる免疫から回避し2回以上コロナに感染してしまう人が増えてしまう可能性があります。

マスクをするべきなのかしなくてよいのか

アメリカでは、公共交通機関でのマスク着用が義務化されてきましたが、フロリダ連邦地裁が4月18日にCDCの公共交通機関でのマスク着用義務を違法とする判断を下してから、TSAが着用義務を解除しました。CDCは、換気が悪いところに密集する傾向があることから引き続きの公共交通機関での着用を勧め、各地域の新規感染者数や入院患者数、病院のベッド使用率などをもとに、インドア全般でのマスク着用や予防対策の目安となるマップを作成しています。日本では法律での義務化はありませんが、ほとんどの場でほぼ全員がマスクをしているようです。感染の広がりが状況、国民性によってマスク着用の事情が大きく変わりますが、暑い日にマスクをすれば具合が悪くなることもある一方、人混みの中、周囲がマスクをしていなくても自分が着用すれば感染リスクがある程度下げられるのも事実です。CDCのマップや状況を見て、マスク着用の必要性を感じる時は着用していきましょう。

ワクチン

ブレイクスルー感染やワクチンの効果が時間が経つにつれ減衰してしまうことからワクチン接種の意義が議論されることもあります。感染するリスクを下げたり重症化を防ぐうえで有効です。年齢別に推奨されているワクチンの種類や回数が表1にまとめられています。今後も推奨点は変わっていきますので、情報をこまめに手に入れましょう。

コロナに感染してしまったら

コロナが疑われたり濃厚接触した時の検査や陽性判明後の隔離期間などに変更はありません。外来治療には、ウイルスの一部に結合し体内のウイルスの

増殖を抑える抗ウイルス薬: Legevrio(molnupiravir)(内服)、Paxlovid(nirmatrelvir+ritonavir)(内服)、Veklury(remdesivir)(点滴)や、ウイルスの表面にあるスパイクタンパク質に結合しウイルスが人の細胞の中に侵入するのをブロックするモノクローナル抗体治療薬(Bebtelovimab(点滴))があります。モノクローナル抗体治療薬は変異株により効果が変わることが多く、新しい治療薬の研究が多数されています。これらの治療は処方箋、医師の指示がなければ受けられず、症状が出現してから5-7日以内に受けないと効果がありません。重症化するリスクがある方は、早めに治療を受けることで入院や重症化するリスクを下げられるので、感染してしまったら家で様子をししばらく見るのではなく、特に症状がひどい場合、早めに医療機関にかかりましょう。初診でも、コロナのオンライン診療、治療を迅速に提供する医療機関(通訳無料)があります。

コロナ後遺症(long COVID, post-COVID conditions)

コロナに感染してから4週間以上経過しても何らかの症状がある状態のことを指します。疲れや咳がよくみられる症状ですが、息苦しい、動悸、頭痛、嗅覚や味覚がもどらない、集中するのが難しい、筋肉痛など症状は多彩です。時間と共に症状が改善することが多いですが、数ヶ月、年単位で症状が続くこともあります。詳しい検査で状態を把握し、合併症の治療やリハビリなどで改善することが多いので、症状が続く場合は、コロナ後遺症外来の受診を検討してもいいと思います。

今後の展開

アメリカ国内の雰囲気はコロナ前に近い状態に戻りつつありますが、コロナは終息したのでしょうか。誰にも確かなことは言えませんが、コロナが完全に終息する日は遠いけれど、アメリカでは、以前のように医療崩壊が起きたり多くの死者がでる大流行は起こらず、パンデミックからエンデミックに移行するだろうと考えられています。その理由として、アメリカ国内では約60%(11歳以下の子供では約75%)が今までなんらかの形でコロナに感染したと推定されること、全人口の約66%がワクチン初回接種を完了したことから、大流行を防ぐのに十分な免疫力が国全体としてついたと考えられています。また、数々の治療薬が開発され治療法が確立してきたのも大きく影響しています。

新型コロナウイルスは他のウイルスと同様に変異し続け、変異に対応するべくワクチン、治療薬も変わっていくのだろうと考えられています。コロナのワクチンもインフルエンザの予防接種のように定期的に接種していくことになるかどうかはまだ分かっていません。2年前まで存在しなかったウイルスが世の中に与えてきた影響はあまりに大きく、少しでも早く状況を改善しようと日々研究は進められてきていますが、時間と共に分かることは多々あり、新たな研究結果をもとにマスク着用、ワクチンや検査などの方針や治療法が変更されることはやむを得ない一面はあります。今までとやっていることが違うと否定的な姿勢をとるのではなく、正確な最新情報を常に手に入れ、自分と周りの大切な人たちを守っていくことの方が大事に思われます。

★福田先生によるCOVID-19 Q&Aの記事(ガルフストリーム2022年2月号Page 5)もあわせてご一読ください。

グラフ1: アメリカ合衆国と日本での1日辺りの感染者数の推移



表1: 年齢別に推奨されているワクチンの接種回数とタイミング

		初回接種	ブースター接種1回目	ブースター接種2回目
18歳以上	ファイザー	3-8週間間隔で2回	初回接種完了から5ヶ月以上経過後(免疫不全者は3ヶ月)	1回目ブースター接種から4ヶ月以上経過後(50歳以上もしくは免疫不全者に適応)
	モデルナ	4-8週間間隔で2回		
	ジョンソン・エンド・ジョンソン	1回	初回接種から2ヶ月以上経過後(ファイザーかモデルナのブースターを推奨)	
12-17歳	ファイザーのみ(接種回数、間隔、接種完了/ブースター接種のタイミングは同上)			
5-11歳	ファイザー	3週間間隔で2回	初回接種完了から5ヶ月以上経過後	適応なし

- ワクチン接種完了(fully vaccinated)とみなされるタイミング: 初回接種完了から二週間後
- ブースター接種済(up to date)とみなされるタイミング: 1回目ブースター接種直後

福田由梨子先生

横浜市立大学医学部卒。ベイラー医科大学感染症科、筑波大学感染症科所属。米国内科・感染症科専門医、創傷治療学専門医、医学博士。コロナオンライン勉強会などを通じて、ヒューストン在住の日本人の方々にコロナ関連の最新情報を発信。



【免責事項】 本記事は、2022年6月2日時点の情報に基づき、情報提供を目的に執筆しています。万一、内容に関して、不利益を被る事態が生じたとしても、一切の責任を負いかねますので、ご了承下さい。